

新型コロナウイルスは夏以降、減少傾向が続く中、水際対策が緩和された状況の中、専門家が懸念しているのが、新型コロナと、インフルエンザの同時流行の可能性です。

新型コロナが出現してから、過去2シーズン同時流行はありませんでしたが、今年は何が違うのでしょうか？

どのような事態が想定されるのか、そして、どう対応すれば良いのでしょうか？政府が示した考え方等をご紹介します。

初期症状

発熱(38℃の高熱)
体がだるい 筋肉痛
関節が痛い 寒気がする

悪化, 重症化

脳症(小児) 肺炎
・高齢者や免疫が低下の方
・心臓や呼吸器の持病の方



★ **新型コロナとインフルエンザ “流行の可能性が極めて高い”**

10月から来年3月に掛けて、新型コロナとインフルエンザの流行が発生する可能性は極めて高い！

とする文書を新型コロナの対策の専門家が連名で、10月5日に厚生労働省の専門家会合に提出しました。これを受ける形で、専門家会合は、『秋以降、インフルエンザが例年よりも早く流行し、新型コロナとの同時流行が懸念され、この事態を想定した対応が必要だ』と指摘しました。

インフルエンザ患者数の推移(医療機関あたり)



★ **過去2年無かったインフルエンザ流行**

新型コロナの感染が始まる前は、毎年冬にインフルエンザが流行していました。1つのシーズンで1千万人、多い年には2千万人が感染したと推計されています。新型コロナの出現(2020年)以降インフルエンザ患者は激減し国立感染症研究所の推計では、2020年から21年は約1万4千人、2021年から22年は約3千人でした。インフルエンザは、東南アジアやアフリカ等の地域では、1年を通して感染が広がっており、それが国際的な人の移動で各国に流れウイルスが広がる環境ができやすい冬の時期に大規模な流行を起こすと考えられてきました。

それが、コロナ対策で国際的な人の行き来が制限されたり、人と人との接触が少なくなった影響で、インフルエンザの流行も起きなかったとみられています。

★ **同時流行下で発熱 私たちはどう対応？**

新型コロナとインフルエンザが同時流行する事態になり、症状が出た場合、私たちはどう対応すべきか、政府は10月13日、発熱など体調不良の時にどう受診すればよいか、考え方を示しました。

《**重症化リスクがある人の場合**》

小学生以下の子どもや妊婦、基礎疾患のある人や高齢者といった重症化リスクのある人は、速やかに発熱外来や掛かり付け医を受診します。受診した医療機関で新型コロナウイルスとインフルエンザの検査を受け、診断に応じて、治療薬の処方を受けるなどの対応をとります。

《**重症化リスクが低い人の場合**》

若い世代など重症化リスクが低い人は、自宅などで抗原検査キットを使って新型コロナに感染しているか確認します。陰性の場合は電話やオンライン診療、掛かり付け医などを通じてインフルエンザかどうか診断を受け、必要に応じて抗インフルエンザ薬の処方を受けます。陽性の場合は健康フォローアップセンターを通じて登録し、自宅療養となります。ただ、症状が重いと感じるなど受診を希望する場合には、発熱外来や掛かり付け医を受診するとしています。

新型コロナもインフルエンザも呼吸器の感染症で感染経路は似ており、取るべき対策は大きく変わりがなく、以下のような対策が基本になるとされています。

★ 発熱等の症状がある場合は、学校や仕事には行かず、ほかの人との接触を極力避ける。また休養が重要です。

★ 手指の消毒、屋内で人と近い距離で会話する場面等では、マスクを着用する。飲食店等では換気を徹底する。

同時流行した場合の感染の規模を小さくする意味でも、こうした基本的な対策を常に心掛けて行動しましょう！

※ 感染防止対策：① 両ワクチン接種！ ② マスク着用！ ③ 手洗い励行！ ④ ゼロ密！